

世界の声、地球の声を聞こう！

中村 有佐
南足柄市立南足柄小学校

- ◆実践教科：総合的な学習の時間
- ◆時間数：33 時間
- ◆対象学年：小学校 6 年生
- ◆対象人数：109 人（3 クラス）

◆実践の目的◆

30 時間程度をかけた総合的な国際理解教育の単元を考えた。以下がその主な流れである。

- 1 世界を知る（7 時間）
- 2 世界を調べる（夏季休業中の課題）
- 3 国際協力活動を考える（6 時間）
- 4 世界にふれる（6 時間）
- 5 まとめ、伝える（14 時間）

単元を中心である「国際協力活動を考える」にパラグアイで研修してきた内容を据えた。そこでは、海外青年協力隊員や NPO スタッフにスポットを当て、その人たちの声を子どもたちに紹介し、彼らの気持ちを考えさせたいと考えた。血の通った温かさが感じられるような形で子どもたちに伝え、身近な存在として感じさせ、人の「生きざま」を学ぶことを通して子どもたちが成長する実践を目指した。

◆授業の構成◆

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1～7 限目 1 世界を知る ○いくつかの国の様子や文化を知ることで、視野を広げ、世界を見る新しい視点をもつ。	(1) オリエンテーション 世界遺産の紹介、ビデオ視聴、世界のことでも知りたいことの記述をする。 (2) マレーシアについて 元日本人学校教諭の話聞く。 (3) モンゴルについて 馬頭琴の CD を聴き、ビデオ視聴する。 (4) タイについて タイの家のペーパークラフトを作り、日本と似ている点、異なる点を考える。 (5) オーストラリアについて I アップサイドダウン マップを見る、ビデオの視聴、アボリジニの文化・世界遺産 ウルルを知る。 (6) オーストラリアについて II オーストラリアに住んでいた方の話	(1) 世界遺産の写真、「地球データマップー自分・世界・地球ー」 (2) マレーシアについてまとめたパワーポイント (3) 「地球家族ーモンゴル編ー」 (4) 「チャークリン君の家」 (5) アップサイドダウン マップ、「英語でしゃべらないと」r. オーストラリア編」ディデエリジュ、アボリジニの写真・作品

	<p>を聞く。</p> <p>(7) アメリカ、エチオピア、ネパールについて フォトランゲージの手法をつかう。</p>	<p>(7) フォトランゲージ（アメリカ、エチオピア、ネパール）</p>
<p>2 世界を調べる （国際理解新聞づくり）</p> <p>○自分が興味を持ったことを調べることで事実を知り、事実を見つめなおす。</p> <p>○分かりやすく伝える方法を工夫して調べたことをまとめる。</p>	<p>夏季休業中の課題</p> <p>世界や地球のことで、自分が興味を持ったことを調べ、壁新聞にしてまとめる。</p>	
<p>8～13 限目</p> <p>3 国際協力活動を考える</p> <p>○人物に沿って学ぶことにより、具体を自分に引き寄せて考え、「人」に思いを馳せながら国際協力について実感を伴った理解をする。</p>	<p>(8) 国際協力活動について ビデオ視聴、国際協力活動の説明（JICA、NPO、ユニセフ）</p> <p>(9) パラグアイについて パラグアイについての説明、パラグアイの子どもたちに伝えたいことを訊く、アンケート</p> <p>(10) パラグアイの概要と海外協力隊の活動 パラグアイの概要説明、海外協力隊の活動などについてのビデオを視聴する。</p> <p>(11) ヨコハマスクール （日本の NPO 法人が建てた学校） ビデオ視聴、日本の NPO 法人代表の山本美智子さんについての説明、年表を用いた学習問題づくりをする。</p> <p>(12) 山本美智子さんの思い I 山本さんがアルゼンチンに移住したことから海外移住について資料をもとに学ぶ</p> <p>(13) 山本美智子さんの思い II 資料から山本美智子さんの生きざまや思いを知るとともに、自分の考えを深める。</p>	<p>(8)「地球データマップー平和への地図ー」「プロフェッショナルーユニセフ職員ー」</p> <p>(9) アンケート用紙</p> <p>(10)「海外協力隊の活動などについて編集したビデオ」</p> <p>(11)「日本の NPO 法人が建てた学校で、児童のアイデアをもとに行った授業のビデオ」</p> <p>(12) 移住推進のポスター、海外移住者数の推移のグラフ、「ブラジルに伝わる移住者の歌」、「新聞記事ー南米のヘソに大和魂ー」</p> <p>(13) 山本さんへのインタビュー、山本さんの物語（自作）</p>
<p>14～19 限目</p> <p>4 世界にふれる</p> <p>○外国の人とコミュニケーションをとることを通して、その人に親しみを持つと同時に、その人の国</p>	<p>(14) ～ (17) 国際交流会に向けて 国際交流会（JICA 横浜海外研修員学校訪問）の計画、出し物の練習、運営の練習、英会話の練習など</p> <p>(18) ～ (19) 国際交流会</p>	

<p>を身近に感じるきっかけとする。</p>	<p>日本の遊び紹介、グループに分かれての自己紹介やゲームなどを通して外国の人とコミュニケーションをとる。</p>	
<p>20～33 限目 5 まとめ、伝える 「伝えよう 私たちの心を」 ○「世界の声、地球の声を聞こう！」の単元を通して学んだことをまとめる。 ○発表することを通して、学習を振り返るとともに、学んだことを人に伝える喜びを体験する。</p>	<p>(20) ～ (32) 学習発表会の計画、練習、準備 「世界の声、地球の声を聞こう！」の単元を通して学んだことをまとめ、詩「私はひろがる」とリンクさせ、演出をし、群読をする。最後にメッセージと共に「imagine」を歌う。 (33) 学習発表会</p>	<p>詩「私はひろがる」岸武雄 曲「imagine」ジョンレノン</p>

◆授業の詳細◆

1 世界を知る (9時間)

ここでは「いくつかの国の様子や文化を知ること、視野を広げ、世界を見る新しい視点をもつ。」ことをねらいとした。オリエンテーションでは、世界遺産を紹介したり、NHKの番組「地球データマップー自分・世界・地球ー」を見せたりして、世界のことに興味を向けさせ、世界のことで知りたいことや自分たちでやってみたいことなどを書かせた。そこでは、知りたいこととして「いろいろな国々のこと」「世界遺産」「世界の食べ物」「戦争」「温暖化」などが挙げられ、やってみたいこととしては、「外国の人と話をしたい」「外国の人と一緒に遊びたい」「外国に行ってみたい」などが挙げられた。それらをもとに単元の大きな流れを考えていった。まず1～7限目にかけて、いろいろな国を知ることから始めた。その国に住んでいた方に話をしていただいたり、その国の音楽を聴いたり、その国の特徴的な実物を見たり、ビデオを視聴したりしながら学習を進めていった。授業後の感想をいくつか記す。

【オリエンテーション】

自分たちがなにげなく食べている食べ物などを食べることができない子どもたちがいることを聞いて私はとても悲しくなりました。なぜなら私の身のまわり（家など）にはいつもなにかしら食べ物があり、食べることができるからです。でもないから食べることができないなんて、わたしたちの生活では考えられません。それに生活に困っている人たちとお金をたくさん持っていて何不自由のない生活をしている人たちとの差が大きすぎることにすごく驚きました。

【マレーシア】

私はマレーシアという国のことを全然知りませんでした。また一つ外国のことを知れて良かったです。お経のようなもの（コーラン）が毎朝流れたり、お祈りをする方向が決まっていたり、1日5回もお祈りをする時間があったりと、とても宗教に努めている国なんだなあ、と思いました。私の家は仏教だけど、お祈りとかお経とか全然したことないのにマレーシアでは、小さい子もしっかりお祈りとかしてすごいと思いました。あとはいろいろな民族が住んでいていいなあ、と思いました。なぜかといういろいろな民族の人と、いろいろな言葉を使いながらしゃべれるなんていいな、と

思ったからです。マレーシアだけではなくて、いろいろな国のことを、もっと知りた
いと思います。今度の国はモンゴルなので、どんな国なのか楽しみです。

2 世界を調べる

夏季休業中に「世界や地球のことで、自分が興味を持ったことについて調べ、壁新聞にしてまとめる」という課題を設定した。自分が興味を持ったことを調べることで事実を発見し、見つめなおし、分かりやすく伝える方法を工夫してほしいと考えた。児童のテーマは「戦争と平和」「JICAの活動」「ユニセフの活動」「世界遺産」「世界の国々」「世界の食」など多岐に渡っていた。

3 国際協力活動を考える (6時間)

海外青年協力隊員やNPOスタッフにスポットを当て、その人たちの声を子どもたちに紹介し、彼らの気持ちを考えさせたいと考えた。ここでは特にNPO法人マーノ・ア・マーノを設立した山本美智子さんにスポットを当てた。マーノ・ア・マーノはパラグアイに貧困から教育の機会を得ることが難しい地域の子どもたちのためにヨコハマスクールという学校を作ったり、パラグアイやアルゼンチンの子どもたちと日本の子どもたちとのサッカーを通じた交流活動を進めたりしている。山本さんには、教師海外研修の事前研修でお会いした。その前向きな姿勢に感動し、後日、東京の事務所で取材をさせていただいていた。

実践では、まず8限目に、国際協力活動を紹介する授業を行った。次時に教師海外研修について話をするにあたってベースになる学習である。NHK番組「地球データマッパー平和への地図―」「プロフェッショナル―ユニセフ職員―」の一部を見せ、JICA、NPO、ユニセフなどの説明をした。戦争や貧困については単元の初めから関心が高かったこともあり、児童の真剣なまなざしを感じた。

9限目に、パラグアイへ教師海外研修に行くこととその目的を児童に伝えた。また研修の中で、ヨコハマスクールで授業を行うこと、についてはヨコハマスクールの児童に伝えたいことを皆から聞きたいということを伝え、意見を募った。児童からは、紹介したいものとして「学校や自分たちの様子(学習・給食・遊び)」「日本の文字、歌、遊び、食べ物、服装」などが出された。また知りたいこととしては、「生活の様子(食べ物・服装・家)」や「学校の様子(学習・遊び)」、「有名な人」などが出された。ヨコハマスクールの児童を身近に感じさせるためにも、自分たちとつながっているという感覚をもたせるためにも、これらの児童の意見を生かして授業を組み立てると共に「本校6年生児童の意識に関するアンケート」をとって、日本とパラグアイの子どもたちの意識の比較をし、双方の子どもたちにお互いの似ている点、違う点を気づかせたい、と考えた。

研修を終えてから行った10限目には、パワーポイントでパラグアイの概要の説明をし、海外協力隊の活動や隊員のインタビューなどのビデオ視聴をした。児童の目の前にいる存在である私を通して隊員の「生の声」を聞かせたかった。以下は児童の感想である。



【パラグアイ】

- パラグアイの人は野菜が高く買えない人もいる。健康に関する知識も少ないからよく体をこわす。ぼくたちは、平気で食べ物を残したりしているけど、パラグアイの人は不自由な暮らしをしているのだなと思った。すごく違いがあると思った。(理学療法士として派遣された海外青年協力隊員の話の中で) リハビリとかもちゃんとした器具がそろわず、日本ならうまくいくこともうまくいかないのは、大変だろうと思った。
- パラグアイの人はとても親しみやすい。多くの貧しい人がいると聞いていたけれど、みんな表情が生き生きしていて、とても貧しいとは思えない。日本のマンガを知っていたのにはびっくり。人気があるのかな。パラグアイに行って日本の文化を教えたいなあ。

11 限目には、ヨコハマス쿨の様子と児童のアイデアを元に行った授業の様子をビデオで視聴し、マーノ・ア・マーノ代表の山本美智子さんについての説明、彼女に取材して作った年表を用いた学習問題づくりをした。児童は間接的にだが、パラグアイの子どもたちと関わり合えたという実感が持てたようである。以下は児童の感想である。

【ヨコハマス쿨】

- 授業のビデオを見ると笑顔がたくさんあって楽しそうでした。自分たちのアイデアが授業に役に立って、ヨコハマス쿨の人たちも喜んでいたので良かったです。自分たちが遊んでいるもの(大縄やフリスビー)も楽しんでいたので、うれしかったです。ヨコハマス쿨の人たちが日本に来たいから日本語を勉強していることを知ったとき、ぜひ日本に来て楽しんでほしいと思いました。
- 勉強もしっかりやっていますすごいと思いました。日本の子どもたちと同じように明るい、日本に行きたい!という気持ちで、がんばって勉強しているのだと思うと私も「がんばらなくちゃ」と勇気がもらえます。ビデオの向こう側から聞こえてくるピアノの音も日本と同じような感じがしました。パラグアイの子はピアノの吹き方を知ることで、ピアノが宝物になると思います。



<山本さんの年表を見て児童から出てきた主な学習問題>

- ・山本さん一家はなぜ移住したのだろう。
- ・なぜキリスト教徒になったのか。
- ・なぜ、サッカーでの交流を始めたのだろう。
- ・なぜヨコハマス쿨を作ったのだろう。



山本美智子さんへのインタビュー

12 限目は、多くの児童が疑問に感じている「海外移住」にスポットを当て資料をもとに学習した。使用した資料は主に「海外移住資料館の展示案内」からとった。資料1

13 限目は、児童から出てきた学習問題にからめて、ヨコハマス쿨を設立するに至った山本美智子さんの生きざま・思いを知り、考える時間とした。インタビューしたことをまとめたものや当時の山本さんの思いを物語風にまとめたものを資料にした。資料2 以下は児童の感想である。

【山本美智子さんの思い】

- 山本さんの思いがとても優しく強いことに感動した。ストリートチルドレンに段ボールをあげたり、頭のシラミをとってあげたり、普通の人ならまず嫌がることを自分からやっていて、この人はとても心のきれいな人なんだな、と思った。自分のお金をなくしてまで他の人のためにつくしているのがとてもすごいことだと思う。安易な考えで納得せず、「もっと自分にできることがある」と努力し続けている山本さんは普通の人とは違う人のような気がした。
- ◎山本さんは自分でいろいろと考えて、いつも道を開いてきてすごいと思いました。私が山本さんだったらホームレスの子のシラミなんて取らないだろうし、パラグアイの人々のことを見て見ぬふりをして助けないと思います。山本さんの生き方は、自分のことの前に貧しい人、ほかの人が優先の考え方で、その生き方もすごいと思いました。

4 世界にふれる (6時間)

単元の初めに「外国の人と話をしたい」「外国の人と一緒に遊びたい」という思いを持っていた子どもたちにその機会をつくり、「外国の人とコミュニケーションをとることを通して、その人に親しみを持つと同時に、その人の国を身近に感じるきっかけとしてほしい」と考えた。具体的には「JICA 横浜海外研修員学校訪問」をお願いし、「6年生の国際交流会」として設定した。研修員は10名、国籍はブルキナファソ・ガーナ・ヨルダン・パキスタン・パレスチナ・サウジアラビア・南アフリカ共和国・スーダン・シリア・ウガンダである。教師団と児童で国際交流会に向けて計画を立て、出し物や全体会の練習、英会話の練習、会の準備などを進めていった。国際交流会の内容は、児童の合唱、合奏、日本の遊び紹介、グループに分かれての自己紹介や質問、ゲームなどを通してコミュニケーションをとる、などである。児童が自分の力で必死に外国の方に関わって行ってほしいと願い「先生たちは通訳したりしません。自分たちの力でグループ活動を運営するように。」と言っておいた。当日、体当たりで何とかコミュニケーションしようとする子どもたち。「言葉はよく分からなかったけれど気持ちは通じるんだ。」ということを実感したようである。研修員の方々も「とても楽しかった。子どもたちと一緒に撮った写真を記念にぜひほしい。」と言ってくれた。

【国際交流会】

- 最初は、外国人と交流するのが少し怖く思っていたけれど、みんな優しく接してくれてとても楽しかったです。私は最初、パキスタンの人と交流すると聞いて少し不安になりました。パキスタンというと戦争とかがあって怖いイメージがあったから、やっぱり来る人もちょっと怖いんじゃないかな、嫌な気分にしてしまったらどうしよう、などと不安に思っていました。でも日が近づくにつれてドキドキしてきて、楽しみになってきました。外国人とちゃんと話すのは初めてで、自分の英語はちゃんと通じているかな?とか、発音は間違っていないかな?とか、ちょっとだけ心配だったけど、きちんと話ができ良かったです。研修員の人たちは私たち子どもにも対等に接してくれて、しかも「とても礼儀正しい子どもたちでとても気持ちがよかったです。」とまで言ってくれて、一生懸命にやって良かったなあ、と思いました。パキスタンの人が細かい物を作る技術にすぐれていることも分かったし、今回の交流会は本当に良かったと思います。
- 外国の方と話をすることは、それほどないから最初はすごく



緊張しました。でもいっしょにフルーツバスケットをやって、すごく緊張していたはずなのに、ぜんぜん大丈夫でした。私の質問が通じるか心配でした。でもクツッさんは、とても気軽に答えてくれました。それに、南アフリカ共和国の昔のことも教えてくれました。その話を聞いて、大変だったんだな、と思いました。すごくやさしい人でした。また国際交流会をやってみたいと思いました。

(クツッさんが話してくれたことは、クツッさんのお父さんのことです。クツッさんのお父さんは黒人だったので、学校に行けなかったという話でした。私はその話を聞いたとき、学校に行けるだけでも幸せなんだなあ、と思いました。肌の色がちがうだけで差別するなんてひどいなあ、と思いました。)

5 まとめ、伝える (14時間)

学習発表会では「伝えよう 私たちの心を」と題して、単元を通して学んだことをまとめ、岸武雄さんの詩「私はひろがる」とリンクさせて群読をすることにした。そして最後にメッセージを入れながら「imagine」を歌う、という内容の発表を考えた。この群読を計画し、練習し、準備し、発表することを通して、いままでの学習を振り返るとともに、学んだことを人に伝える喜びを体験してほしいと考えた。

6年の担当教員が一つの目的に向かって結束し、素晴らしい内容の作品ができあがった。児童も真剣に取り組み、見ごたえのある心を打つ発表ができた。

【学習発表会】児童の作文からの抜粋

・・・「こういう人々がすべて幸せにならねば」僕は心を込めてカー杯言いました。

その後「イマジン」の歌を歌い、地球のパネルをみんなで作りました。下級生から歓声があがりました。・・・今年のフェスタ(学習発表会)では、自分の思いを伝えることができたのでとても良かったです。総合で学んだことやフェスタで学んだことをこれからも覚えておこうと思います。

◆実践をふりかえって◆

クラスを持っていない立場で6年の担当教員と協力し、33時間の総合的な国際理解教育単元をやり遂げた。その充実感を感じている。限られた条件や制約がある中、自分なりのベストを尽くしてきた。多くの児童は、世界の国々に関心を持ち、新しい視点を獲得し、国際協力活動を知り、外国の方と心を通わす楽しさを感じ、心を一つにして発表する喜びを感じることができたと考えている。しかし、反省点、課題もある。ヨコハマスクールの子どもたちと山本美智子さんをもっと身近に感じさせたかった。行事の時期や授業時間が取れなかった事情もあるが、もっと詳しく丁寧に扱いたかった。人の「生きざま」を学ぶことを通して子どもたちが成長する実践を目指してきた。目的には近づけたが、今回十分ではなかった点を反省し、今後も自らが目指す実践により近づけるよう努力していきたい。

◆資料編◆

資料1

移住の背景

海外の出かせぎ地で得られる高賃金、また有利な労働条件などを書きしるす、親族、友人からの手紙による、いわゆる「口づたえ」が海外移住を決心する重要な理由となっていた。その他、地方新聞に掲載された、その地方出身の海外出かせぎ地での成功物語、あるいは故郷に錦を飾って帰国した成功者の建てた洋風の家などは、若者たちをふるい立たせた。

(海外移住資料館 展示案内 抜粋)



移住推進のポスター

ブラジルに伝わる移住者の歌

「行こかサンパウロ 帰ろかジャポン ここが思案のパラー州
聞いて極楽 来て見りゃ地獄 落ちる涙はアカラ川」

南米のヘソに大和魂

- ・私たちは、綿やたばこ畑を作るため、木を伐採し、夜通し燃やし続けた。直径2m、高さ20m以上もある巨木は、日本ののこぎりやおののでは、歯が立たない。…
- ・私が移住して10年は電気もなかった。石油ランプで明かりをともし、ドラム缶で風呂をたいた。
- ・野菜作りを始めた日系移民は、肉食中心だったパラグアイ人の食生活を変えたといわれる。現地の人と進んで交流し、慣れない野菜の食べ方も教えた。日本人とパラグアイ人は友情と敬意を持って付き合ってきたのだ。…
- ・日本の農業指導を受けて私たち移住者は大豆の大規模農業を始めた。やがて大豆はパラグアイ最大の輸出品に育ち、日系移民はとても感謝されている。…

1世移民で初のパラグアイ駐日大使 田岡 功 (日本経済新聞より抜粋)

資料2 (インタビューをもとに自作)

山本美智子さんの思い ①

山本さんは、サッカーの交流を通して知り合ったパラグアイの友人たずねて、パラグアイを時々訪れるようになりました。

パラグアイには貧しい人たちが住んでいる地区があります。そこには、仕事が少なく、あまり収入がない人たちが住んでいます。着る物もあまりない、食べ物はキャッサバというイモが少し。一日に一食しか食べられない子どもたちもいました。物売りができる子はまだいい方で、家もないストリートチルドレンになってしまう子もいるのです。それでも人々は一生懸命に生きていました。その様子を見て、山本さんは何とかしてあげたいと思いました。

あなたが山本さんだったら、どんな手助けをしますか。

山本さんは、食べ物を届けたり、日本から着る物を送ったりしました。そこに住む人たちはとても喜んでくれました。人々が喜ぶ顔を見て、山本さんもうれしくなりました。

何回かそんな形の手助けをしているうちに山本さんは思うようになりました。

「これでは何も変わらない・・・。」

「わたしは何をしているのだろう。食べ物は食べてしまえばすぐになくなってしまう。くり返しをしているだけだ。」

山本さんは心の中でいろいろなことを考えました。

「どうしたらいいのだろう・・・。」

山本美智子さんの思い ②

「そうだ。村の人たちは自分たちの力で何とかしていけるような手助けが必要なんだ。」

「村の人が仕事につくことができればよいのだが、読んだり書いたり考えたりすることが苦手な人たちなので仕事を見つけるのは難しい・・・。」

「やはり少し時間がかかるかもしれないが、教育だ。子どもたちに、読んだり書いたり考えたりする力をつけていくことだ。それがいずれは仕事を得る『生きていく力』となる。遠回りのようだけれど、それが一番の近道かもしれない。」

しかし、この村の近くには学校がありません。

「自分で学校をつくりたい。」

山本さんは、思いました。しかし学校を作るには大変なお金が必要です。山本さんは裕福になったとはいえ、ためらいました。

調べていくとパラグアイで学校を作るには500万円以上もかかるのです。

あなただったら、どうしますか。

山本美智子さんの思い ③

山本さんの思いは日に日に強くなっていきました。

山本さんは、決めました。

「学校を作ろう！」

「わたしは、アルゼンチンに暮らし、とても世話になった。パラグアイでもいろんな人に支えられて生きてきた。親しい友だち、かわいい子どもたち…アルゼンチンとパラグアイは私を育ててくれた大事な故郷だ。恩返しをしたい。お金はなくなっても何とか生きていける。人生は一度だけ。私に今、できることをしたい。」

山本さんは動き始めました。協力してくれそうな人を探し、学校を作る計画を進めていきました。